

22. キール運河

ヨーロッパの運河事情はさすが歴史のある国々ばかり中世から相互交流が盛んで、輸送手段として大河を利用しての運河網が大陸の隅々まで造られ現在でも利用されていますから驚きです。島国イギリスは更に完璧と言えるほどの運河網が整備されており、小型船で内陸を家族でのクルージングが楽しめるのですから羨ましい限りです。

皇太子殿下が留学したオックスフォード大学での卒論のテーマは「テムズ川の水運」だそうで、国内でも「江戸と水運」の演題で講演していますから水運、運河には関心があり高学識のお方とお見受け致します。

オランダのロッテルダム港に接岸していたとき、同じ岸壁にスイスの国旗を掲げた 300 トン位の小型貨物船が荷役していたので不思議に思い、尋ねたところ乗り組みはスイス人の夫婦二人だけ、船が居住地だそうで、これからスイス向け復航するとのことには驚きましたが、私の認識不足で、ライン川を遡行してあの山岳国家スイスのバーゼル市まで航行できるのだそうです。勿論途中には幾つかの専用の運河、閘門を経て行くそうですが、「昔からあるよ」とこともなげに言うておりました。しかも現代のように鉄道、道路が完備していても運賃競争で太刀打ちできるそうですから更に驚きです。

もう一つオランダの話ですが、オランダの国土の 1/3 は海面より低いのはご存じの通りですが、港へ入るには海面より低い水面まで降りなければなりません。首都アムステルダム港へ入るには外海であるワッデン海を仕切る巨大な防波堤が築かれており、高速道路になっており、其の一部に閘門がありここからエイセル湖へ入ります。これは湾ではなく完全に仕切るので湖だそうです。更にもう一つ仕切があつてマルカー湖に入って接岸となります。

大昔は広大な入江で葦が繁茂し鴨の猟場だったそうですが、外海を遮断しここに国を造ろうとした人々の動機や背景は何だったのでしょうか。ともかくヨーロッパの各地には山頂に街があったり、海の中だったり宗教的迫害から逃れる手段だったようですが、ここオランダ建国はどうだったのでしょうか。建国後のオランダは世界の商人国家として大活躍し、江戸時代、我が国とは西洋の国としては唯一交流があり、現在でも伝統を守る商人国家は健在です。人々は最低でも 3ヶ国以上の言語を流暢に話し、大卒だと 7ヶ国語以上は常識とのこと、オランダ人は特別語学の才能に恵まれているのでしょうか。バイリンガルなど夢でしかない我々日本人としては僻みたくになります。そこで親しくなったオランダ人に何故そんなに才能豊かなんだと尋ねたところ、ケラケラ笑いだしてその秘密はテレビやラジオにあり、小さい国でフランス、ドイツ、ベルギー等に囲まれ幼少の頃からこれらの国の番組を視ながら育てば全てが母国語、更にイギリスの BBC ラジオ放送で世界のニュースを聴いているから喋れるようになるのは当然だと、更にヨーロッパの言語の母体はラテン語だから共通語が多く文法

も同じだから7、8ヶ国語話せるのは当たりまえとのこと、英語だけで四苦八苦している我々としては羨ましくて悔しい限りです。

さて運河網が発達したヨーロッパの中で最大の運河がキール運河（正式名称は、北海バルト海運河）です。スエズ、パナマとともに世界三大運河の一つですが、歴史が一番古いのです。この北欧はハンザ同盟やバルト三国等古くから交流が盛んで、バルト海への近道として運河が存在していたのです。ただし、現在の運河に比べては小規模のものだったようです。所在地は北欧の左上に突き出たユトランド半島の根本にあります。ユトランド半島はデンマークですが、根本の方はドイツでエルベ川の河口付近からバルト海側の

キールへ抜けるルートで北海とバルト海を繋いでおり、全長 98km、幅 102m、水深 11m の大運河です。北海側に閘門がありますが、高低差ではなく北海とバルト海の潮の満干を調整するためのものです。北海側の閘門は北行き、南行きのドックが平行に列んでおり、その真ん中に小さな売店があります。閘門の所要時間は 20 分位ですから飛び降りて駆け込み、果物や甘味の補給に邁進です。このオバサンは船乗り仲間では有名な人で、世界中の船員が差し出すお金の通貨としての有効性を即座に判断し、かつその日のレートでマルクに換算して品物を売ってくれて、お釣りはキャンデーやチョコレートの現物での支払い、あとで計算してみたらピッタリでしたからまさに神業、しかも計算機ではなく、全て暗算でやっていたから凄いオバサンです。



キールへ抜けるルートで北海とバルト海を繋いでおり、全長 98km、幅 102m、水深 11m の大運河です。北海側に閘門がありますが、高低差ではなく北海とバルト海の潮の満干を調整するためのものです。北海側の閘門は北行き、南行きのドックが平行に列んでおり、その真ん中に小さな売店があります。閘門の所要時間は 20 分位ですから飛び降りて駆け込み、果物や甘味の補給に邁進です。このオバサンは船乗り仲間では有名な人で、世界中の船員が差し出すお金の通貨としての有効性を即座に判断し、かつその日のレートでマルクに換算して品物を売ってくれて、お釣りはキャンデーやチョコレートの現物での支払い、あとで計算してみたらピッタリでしたからまさに神業、しかも計算機ではなく、全て暗算でやっていたから凄いオバサンです。

運河に入ると一望千里の大平原でよく耕された畑地が続き、ドイツは工業国家であると同時に農業国家でもあることを示しており豊かな農村風景を満喫できます。私がこの運河を通過した頃は東西両陣営が極度に緊張していた頃で、運河半ばでは NATO（北大西洋機構軍）軍が河川渡河訓練をしているのに出会い、興味深く見学しました。岸には戦車や装甲車が多数列んでおり、その中に西ドイツが開発した M48A2C 戦車、M60A1 戦車を見付けて感激、更に各種戦闘装甲車両が多数列んでいるのに感激の倍加です。その後バルト海に入りポーランドの港に寄港したのですが、ここにはソ連軍を中心としたワルシャワ条約軍が集結しており、東側の主力戦車 T54/55 が街路を走行しているのに遭遇、初めてみる現物にこれまた感激の増幅でした。70年代は東西両陣営が極度に緊張していましたから、東西ドイツ国境線沿いには強大な軍事力が集結していたようです。其の両陣営を覗き見ることが出来たことに軍事探偵にでもなったような高揚感がありました。また西側を視てきた眼には東側の貧しさには驚きでした。第二次大戦前の日本を訪れたアメリカ人が港には眼のさめるような近代的な軍艦が停泊しているのに一般庶民は水洗トイレもない貧しい生活をしているのに衝撃を受けた

という一文を読んだことがあります、このような衝撃だったのでしょ。

この東西を隔てる国境線にはベルリンの壁とは異なり、朝鮮半島の38度線の緩衝地帯にあるような鉄条網が高くそびえ立ち、機関銃を備えた監視塔が一定間隔であり、夜間はサーチライトが光芒しておりました。これがヨーロッパ全土を二分するように張り巡らされされていたのです。

軍事力のついでに軍港に触れますと、バルト海への出口にあるキール港は第二次大戦まではドイツ最大の軍港で、狭いバルト海に面していますから敵の襲撃を受けにくく、攻撃にはキール運河を通過して北海に素早く展開できるので軍港としては最適な港です。ですからドイツ海軍はポケット戦艦と言われるように運河を航行できる軍艦を配備しておりました。

そして補助する軍港がビルヘルムハーフェンとオランダ国境に近いエムデンでこの二つの軍港は内陸にある運河によって繋がっているのです。さらにエムデンはドルトムトン・エムス運河によってフランス国境にある内陸のルール地方に繋がっておりますから、まさにドイツ国防の中核です。このルール地方にはヨーロッパ最大の炭田があり、かつ重工業地帯でもあるのです。従って第二次産業革命以降農業国から工業国へ転換を図ろうとプロイセン王国はドイツ連合の統一を企り、その帰属を巡りフランスとの争いは絶えずナポレオンと普仏戦争で戦っており、第一次大戦後では無傷で残ったルール工業地帯を巡り支配権を争っております。これを解決したのがナチ党、ヒトラーなのでドイツ国民がこぞって支持するキッカケになっています。これほど重要な工業地帯になれたのは優良な石炭を産出する炭田と鉄鉱石を産出する鉱山を結びつけるのは大量輸送が可能な船舶が運航できるドルトムトン・エムス運河とそれに繋がる運河網が発達していたからです。またドイツ海軍が神出鬼没の活躍できたのもこれらの運河を利用して高速で安全に移動できたからです。これらの運河の効用に触れない歴史書が多いのは残念です。

写真解説

キール運河北海側の入り口で左右にドックがあり、写真の左側の水面はドックで先にあるゲートは閉じられています。これは高低差があるためではなく、北海とバルト海の潮差を調整するために船舶の航過時以外は常に北海側のゲートを閉めています。（潮差は1.5～2m）真ん中に突堤があり小さな平屋がありますが、この中に売店があり、航行中に買い物ができる店は世界で唯一です。屋根の上に船橋の左舷ウィングが僅かに見えますが、右側のドックに入渠中です。

